



# 開会式

## 被爆体験証言

**司会：**ただ今から、被爆体験をお聞きいただきます。本日もご講話いただきますのは、松尾幸子様です。松尾様は、国民学校5年生、11歳のとき、爆心地から1.3km離れた場所で被爆されました。現在、一般財団法人長崎原爆被災者協議会評議員および公益財団法人長崎平和推進協会・継承部会のメンバーとして語り部活動をされています。それでは松尾様、よろしくお願ひいたします。

(以下スライド併用)

**松尾 幸子：**はるばる外国からお越しの平和首長の皆さま、第二の被爆地長崎へようこそおいでくださり、ありがとうございます。本日は、私どもの長崎原爆被災者協議会の会長、谷口稜暉が被爆体験をお話しする予定でしたが、体調を崩し、現在、入院しております。代わりまして私、松尾幸子がお話しさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

72年前の8月9日、当時、私は国民学校5年生で、11歳でした。私の家は爆心地から700mの長崎市大橋町にありました。そこには祖母、両親、兄弟姉妹9人、おば2人、あと5人の合計20人で住んでいました。空襲が激しくなり、怖くて、学校は6月ごろまでしか行けませんでした。

父は馬車で運搬業をしていました。父が「8月8日長崎は灰の街」というビラを見てきて、後ろの岩屋山の中腹の畑に小屋をつくってくれたので、私たち家族は2日ぐらい前から、朝8時ごろ家を出て、夕方5時ごろ自宅へ帰ってきていました。8月8日は空襲など何もありませんでした。

9日の朝、母が父に「今日はもう9日だから小屋には行かない」と言ったら、「アメリカは1日遅れだから、今日までは行くように」と父に言われ、祖母、母、私、弟、妹など皆、10人で小屋に行くことにしました。上の姉がつくってくれたおにぎりやジャガイモの煮たのを持っていきました。

これが山に行ったときの服装です。これはモンペといいます。これは綿(わた)を入れてつくった防空頭巾といいます。これは布でつくった救急かばん、大人にとっては貴重品を入れる袋です。一応、私もこういうのを持っていました。上は長袖のブラウスを着ていました。山にこういう格好で行ったので、もう暑くて暑くて、最初に防空頭巾を外しました。そして着ていたものを皆脱いで、下着になりました。そして私は、自分が持っていった救急かばんの中を、立ったままの状態で見っていました。

爆心地から1.3kmのところです。みんなで一休みしていると、急にピカーッと白いような黄色いような光が光り、それが小屋のトタンに燃え移り、走り過ぎました。「今の光は何だったんだろう」と思いながら、ぼかーんとしていました。すると、今度は、ドーンとすごい音がしました。それから分からなくなりました。真っ暗の中で気が付くと、小屋はなく、はだして土の上に立っていました。「みんなどこにいるとね、けがはしてないね、大丈夫ね」と叫んでいる母の声が聞こえました。明るくなってみると、母は私の目の前に立っていました。見ると、額を打ち、それがみるみるうちに膨れて、片方の目が見えないようになりました。

2番目の弟が首の後ろを切って、傷口が大きく開いていました。一緒に行っていた男の子と女の子の

2人が、ひどいやけどをしていました。小屋は下の谷の方に爆風で飛ばされて、横にあったサツマイモの畑は、葉っぱもくきも草もありませんでした。一瞬に運動場のように土ばかりになっていました。一瞬であの原爆にやられたのでしょうか。それでも米軍の飛行機が低く飛んできて、私たちから操縦席が見えて、とても怖かったです。

しばらくしたら家が心配になり、家が見えるところまで行きましたが、まちの上には黒い雲のようなものがきれいに覆いかぶさっていて、それが私たちがいる上の方に向かってもくもく上ってきていました。だから、下は何も見えませんでした。祖母が「もうみんな死んでしまった。世界が終わった」と言って泣きました。母が一番下の弟を背中にしょって、けがしている弟と3人で、山から下りてきました。そのとき、私とすぐ下の弟は怖くて行けません。母たちは、ほどなく戻ってきました。下の道ですごいやけどをしたお母さんと子どもさんたちに会ったそうです。やけどがひどくて、名前を言われて隣町の人と分かったそうです。「お水を飲ませてください」と言われたので、お水だけ飲ませて、下に下りていくのを諦めて戻ってきました。

3時ごろだったでしょうか。ことごと音がして、誰かが山を登ってきています。近づいてよく見るとそれは父でした。頭・手足などを三角巾で巻いて、真っ黒に汚れてけがをして杖をついていました。でも、うれしくて泣きました。そのときは本当にうれしかったんです。父は警防団員で、大橋の詰め所で被爆し、建物の下敷きになり、人に助けてもらったそうです。助けてもらって外に出て、びっくりした。家も工場も皆つぶれて、燃えていたそうです。助けてもらった父はとても具合が悪かったのです。

これが父です。父はこの兵器工場の前にあった警防団詰め所で被爆しました。

これは、ガスタンクです。先ほどの工場が使うために、1個だけこのガスタンクが設置してありました。父がこれを見たとき、自分がこんなに具合が悪いのは、あのガスタンクのガスを吸ったからだと思ったそうです。上空で原子爆弾がさく裂して放射能を浴びたの知らない父は、ガスタンクのガスを吸ったからだと思ったそうです。山に来て、私たちが皆生きていたので、「良かった」と言って喜んでいました。

日が暮れかかったときに、いとこの2人が様子を見に来てくれました。朝、私たちにお弁当をつくってくれた姉が家で焼け死んだと聞きました。

これは兄嫁です。この兄嫁は、親戚のところに行っていて、そこでその家族と一緒に焼け死んだそうです。

9日の午後、最初の救援列車が来たので、おばの1人はやけどがひどく、救援列車で病院に運ばれていました。女学生だった2番目の姉は、大橋工場で被爆し、けがをして防空壕に逃げてきました。

これが、やけどして病院に連れていかれたおばです。皆さん、こういう状態です。

その夜は山で過ごしました。飛行機が飛んできて照明弾を落とし、昼間のようにパッと明るくなり、ドーンドーンと音がして、怖くてぶるぶる震えながら、明るい炎に包まれているまちを見ていました。



## 開会式

---

翌日 10 日の朝、弟たちと山を下りました。木が皆倒れていて、道をふさいでいました。死体が転がっていました。家は一軒もなく、何とも言えない臭いが漂い、まだ燃えているところもあり、そばを通ると、熱くて白い灰になったところにはたくさんのお骨が転がっていました。

初めは怖かったです。まだ熱い灰の上を歩いて防空壕に行きました。たくさんの人が逃げてきていました。けが、やけどをした人、けがもやけどもしていない人もいましたが、中はうめき声、泣き声すごかったです。1km 以内から逃げてきた人は皆さん苦しみながら死んでいかれました。ひどかったのは、口の中が腐り、熱が高いのに水が飲めない。おなかがすいても何も食べられない、初めは助けてもらい喜んでいた人が、「何で私はこんなに苦しまなければいけないのだろうか」と泣いておられたのが忘れられません。

小屋におにぎりを持っていていましたが、土が付いて食べられず、おなかがすいてふらふらしながら山から下りてきました。私の家も焼けて、食べ物はなく、白い灰の中に、姉のお骨がありました。家の前には近所のお姉さんが死んでいました。近くの溝の中に妊婦さんが死んでいました。腐って数日たってお骨になり、大きな頭蓋骨と小さな頭蓋骨がいつまでもそこにありました。

父と同じ警防団員だった兄は、山里国民学校の屋上で敵機来襲の鐘を鳴らしたことを聞いて、探しに行ったら、爆風でここからこの下の屋上まで飛ばされて、死んでいたそうです。でも、そのときは死体を下ろすことができず、次に行ったときには、もう片付けられた後で、なかったそうです。

汽車で病院に運ばれたおばは、諫早で 11 日に亡くなっていました。お骨をもらってきてお墓に入れました。

でも、すぐ上の兄とおばはどうとう帰ってきませんでした。今でも分かりません。3 人の名前はお墓に「昭和 20 年 8 月 9 日死亡」と刻んであります。

私たちはずっと防空壕にいました。父が「ガスタンクのガスがこの辺りに残っているので、ここから離れた方がいい」と言いました。

15 日、戦争が終わったと聞いて、親戚が疎開していた時津というところに行きました。長崎では原爆で病院も壊滅状態だったので、大けがややけどを負った人たちは治療も受けられずに寝かされ、苦しんでいました。うめき声だけでした。周りにいる者も、ただ死ぬのを待っているようなものでした。防空壕の近くで死体を焼くので、すごい臭いが漂っていました。

けがをしていた父は、1 週間ぐらい遅れて時津に来ました。時津には病院があったので、病院の先生に毎日注射をしてもらいましたが、髪の毛が抜け、熱と下痢に苦しみながら、8 月 28 日に亡くなりました。とても悲しかったです。でも、1 回の治療も受けられずに死んでいった人たちのことを思うと、父は治療を受けられただけでもいい方だったと、今は思います。

私の家では結局、7 人が亡くなりました。これが亡くなった 7 人の家族です。すぐ上の兄と 1 番目のおばの行方が分かりません。これが、私たちが行っていた学校の屋上で死んでいた兄です。

被爆したときに私たちは、ちょうどこの辺りにいました。これはもう被爆した後で木が燃えてしまっ  
て灰だけになっていますが、あのときはまだ緑がいっぱいあったのです。こちら辺りにいました。1.3km  
なのです。

そして、私が行っていた学校の生徒は、1,581名のうち1,300人が原爆で亡くなっていました。一緒  
に遊んでいた友達のほとんどが亡くなりました。もうあの体験はしたくないです。誰にもさせたくな  
い。私が子どものとき、大人たちが大東亜戦争開戦をラジオで聞きながら喜んでいたので子ども心にも  
覚えています。子どもたちは小旗を振って、出征していく兵隊さんたちを見送りました。今になって、  
あのときの若い兵隊さんはどんな気持ちだったのだろうかと思えます。戦争が始まってしまえば、ど  
こにも逃げることはいけません。

核兵器は悪魔の兵器です。今でも放射能が原因と思われる病に苦しんでいる人がたくさんいます。  
私も甲状腺の病気です。最近、がんの手術も受けました。72年たった今でも、核兵器が存在するこ  
とは絶対に許せません。

被爆者たちの呼び掛けで「ヒバクシャ国際署名」がスタートしました。長崎では「署名をすすめる  
県民の会」ができ、中村県知事、田上市長も「長崎から核兵器廃絶の署名を！」と街頭で訴えられま  
した。先月、国連で核兵器禁止条約がたくさんの国の賛成で採択されました。本当にうれしいです。  
核兵器を世界から廃絶させましょう。長崎を最後の被爆地にしましょう。ありがとうございました。

**司会：**松尾様、どうもありがとうございます。それでは、会場の皆さまから質問やご感想などがあれ  
ば頂きたいと存じます。どなたかいらっしゃいますでしょうか。よろしいでしょうか。

貴重なお話をしていただきました松尾様に、どうぞ皆さま、いま一度大きな拍手をお願いいたします。  
ありがとうございました。被爆体験証言は松尾幸子様でございました。